

京鹿子



1月号

京鹿子祭特集号

豊 田 都 峰

叡林集 その一



国 つ 神 齋 け る 千 木 へ 山 粧 く
朝 霧 の こ ぼ れ 光 る を 悼 み と す
フ ラ ミ ン ゴ 十 歩 か ぎ り の 秋 う ら ら
石 仏 の 眉 目 は 朝 の む ら 時 雨
鴨 づ つ み し ぐ れ に じ み の 灯 を ひ ろ ふ
草 の 穂 の さ ゆ れ 夕 灯 遠 く す る

里宮のほひぶくろの花
柎うぶすなに花ひひらぎのこぼるる日
風を聞く穂草のあたり村ざかひ
山の日の雑木もみぢに酔ひはじむ
木の葉散るその時空の青かりき
里山は月夜つづきに木の葉降る
木戸たたたく木の葉まじりの夜の風
木の葉散るかくてすぎゆくことばかり

秀華採集

ひぐらしのページは痛い白のまま

直江裕子

「ひぐらし」の声は思い出を誘う。思い出を「白いページ」として「痛い」とするところに青春のころの心が滲む。せつなさが滲む。「ひぐらし」のひとつの典型を具体化している。

晩秋や机の上の砂時計

永岡享子

夕暮の甘さに惹かれつくつくし

林達男

前句の「晩秋」と「砂時計」の組み合わせがよく、後句の「甘さ」と言い切った点が驚き。

鈴鹿 仁

枯蓮

朝もみぢ序として涌きし詩ごころ

一善として枯蓮の極みなる

短日や不意にひとりの走り出す

—追懐—（その五）

人は悔人は笑べり大かりん

〔昭和六十三年作〕

寡黙せしことも意のありかじけ鳥

〔平成三年作〕

近 詠

和田 照海

落し水

平家谷かかれば虫のまんじ鳴き

蕎麦はぜの脚の太さも平家ぶり

鬼の子の風にも敏き平家谷

隠し田のいざなひごころ威銃

隠堂畳を拭いて月を待つ



神麓集

小夜時雨

藤岡紫水

露座佛を音なく洗ふ小夜時雨
暮れ早や山路にひそと実むらさき
まうしろは何もない空石榴の実
立つ影も佇む影もみな小春
枯芦に吹く風枯れて出でゆけり

時雨虹

松本鷹根

散る紅葉急くことはなし石に坐す
門院陵>白ド砂青松冬に入る
裸木の聳え促す空青し
魼の沖時雨の雲が陽を零す
傘傾げ仰ぐ比良には時雨虹

松田都青

先つぼの好きな蜻蛉の自閉症
包帯が嫌いな傷は秋が好き
父と言ふ高さのわかる敬老日
天国の真正面だよ夕焼ける
燕帰る一羽一羽に車間距離

皆既月蝕

北川孝子

菊今宵この世の過客として老ゆる
暮れ方の寂をまとひて塔の秋
ゆつくりと猫裏返る草ひばり
濃く淡く面影を追ひ萩今宵
皆既月蝕人間ひとへにうそ寒し

南天の実

丸井巴水

南天の実や置石の貌決まる
川なかば鹿の四つ足鏝つかず
稲妻や一瞬消ゆる読書の燈
イカ墨のパスタ港の霧迫り
南天の実の重たさや裏鬼門

カサブランカ

塩貝朱千

秋蝶やそはかと師碑に迎へらる
秋風や師の囁きに耳凝らす
カサブランカわが生涯に二人の師
やはらかに句碑を彩どる風すすき
秋ふかむ連理の句碑と夫婦墓

京鹿子大賞受賞作品

京都市

鈴鹿けい子

番人のめがねのくもる青葉木菟

もういくつねむると白いまんじゆしやげ

ひぐらしの語尾の省略うすずみに

密約の雁の玉章ぬりつぶす

略図のやうな砂漠め遺跡星月夜

昔日の堰切つて黄葉ふりしきる

秋蟬や自問自答のくぎりつけ

こめかみに耳の字三つ軋む秋

三枚におろし散らばる秋の雲

歳晩や磨き残しのある齡

深井面は門外不出のちの月

冬ざれて慕ひし影を見失ふ

当面はぬれ衣を着る枯蓮

風聞をそらしてをりぬ虞美人草

捌け口が見つからなくて冬ざるる

ひたすらに紅閨を編む女郎蜘蛛

盗聴を決め込んでゐる冬の蜘蛛

打ちつ放しのビルに同化や走り梅雨

脈診によよと溶け出す雪女郎

まどろみの指のさめゐる河鹿笛

成長痛を剥がしてをりぬ今年竹

河骨や踵をあげて風を詠む

をがたまの花は吉方つかさどる

ねむれずにくぐもる魚と梅雨の月

花ミモザ縁取りひかる封緘紙

ががんぼや弱音を吐けばばらばらに

病葉や指紋剥離といふ次第

負の連鎖も神の手の内はしり梅雨

夕ざくら気はむらさきの淵に棲む

ひとおよぎ蛇は女人へもどりゆく

京鹿子新賞受賞作品

京都市

澤近 栄子

七夕や枕に聞かす私小説

ロザリオといふ名の葡萄おもてなし

首塚や振れば鳴りさう蝉の空

いも掘の親指ほども数に入れ

ひまはりやすこし遅れて廻るくせ

残る蚊に刺されてはずす婚指輪

秋夕焼かもめのやうな街跡灯

名刹の昼の行燈秋惜しむ

秋思曳く石灯籠の市女笠

石山や月に帰心の夕鴉

バイキングの皿の重さよ秋うらら

たましひの鼻から抜けてうかれ猫

エンディングドレスは黄いろ冬の蝶

待ち合はせもしや待ち伏せ恋の猫

切れの良いお国訛りやふぐの鱈

七転び八起きは不得手雪だるま

絵画売る天才奇才文化祭

瀬田しじみ父郷母郷は西東

赤い羽根啞へて青い鳥が翔つ

望楼や安土姉川風光る

書初の馬の字サラブレッドかな

藤棚に神代にさそふ風を待つ

ウインクは性に合はない福達磨

ジャンクシヨン過ぎて逃げ水加速する

三面の一つ妣かも初鏡

草刈つて鴉にお辞儀してもらふ

千代の春青と赤毛の出世駒

乳歯抜け口に涼しき風吹くと

京鹿子新賞受賞作品

福山市

藤井 杏愛

空事へ 頷く 背に 霧 匂ふ

冬ざれやうしろ姿にまかせおく

何も彼も沈めて海は秋になる

鉛筆の芯欠けてゆく冬はじめ

月涼し波音の降る里の世

古里は海から暮れて山眠る

修羅を知る月の眼を誘ひぬ

気にすれば気になる月の北枕

浜木綿の咲きつぐ里に眠りたい

小春日や吾子の瞳の万華鏡

ともかくも話す相手のゐる冬日

小春日を両手で掬ふ母の笑み

寒紅の言の葉よりも暮れなづむ

追憶のこだま残して夜半の春

虎落笛合点のいかぬことばかり

揺り椅子をとめて戴く春の月

初空や何故か亡父の下駄をはく

残り香をたたむ夕日の花杏

面影の時雨れてゆくや鞆の浦

夕日より色を授かる恋椿

水仙を探して雨の独り言

滴りのおはじきをする里の山

春の色こぼして浜に遊びけり

さよならを整へてゐる夜の秋

滲み出るペンの先から小夜時雨

春恋し行き先知らぬバスに乗る

折鶴を貴女に飛ばす冬灯

残心のありて古里月涼し

京鹿子新賞受賞作品

月ヶ瀬

上田由姫子

夏木立越えで広みの開墾地

里輪いま木槿紅白咲き満ちる

夕蟬や卒寿日課の畑廻り

盆僧のほか陰なし里ま昼

大粒の雨従へてはたた神

山あひを雲離れゆく男郎花

待宵草藪より風を集めをり

谷間の細き流れや萩の叢

少女らの弾ける笑顔縷紅草

木犀の庭にとどまるバイク便

ひと籠の間引き菜抱へ回覧板

鳥のこゑ消えしひととき雪解風

山裾の風のかたちに枯芒

道まつすぐ配達便の雪轍

長き夜や古書の翁のめでたけれ

春ともし溪の奥なる一軒家

祝宴の窓パノラマに秋の山

湧きてまた流れる雲や花こぶし

山眠るパステルの彩使ひきり

バス降りし一步に桜吹雪かな

夕凍みや風カラカラと裏返る

同窓の尽きぬ話や遠蛙

年惜しむ夫は寡黙に螺子を巻く

腕ほどのたかな抱へをんな去ぬ

溪一つ深く鎮まる冬の雨

植田みち里曲のあかり遠近に

大欠伸三日の空はまさをなり

姫女苑そよぎて山の風誘ふ

募集大作賞

京都市

山田和

一刀彫

新涼や能舞台なる足一拍
小面の細き声なる月明り
花すすき安土の風をはなさずに
焼け罅の天守の礎石雁のこゑ
墨の濃き城主の花押鹿威し
駒寄せの半ばは朽ちて酔芙蓉
秋の蚊の音なく刺せる閻魔堂

黄葉明り如来はまるき印結ぶ
秋深む木目となりし冥土の凶
日の短かうつぼかづらの落し穴
修羅曳きし杣のみちなり残る雪
雪被るキリシタン燈籠夕茜
初日影一刀彫の波頭
はるかなる御堂の燭り飢を挿す
起き上る竹の響や雪解光

募集大作賞

京都市

小山和男

朧 月

踏み込みの一步を磨く寒稽古
大佛に吸ひ寄せられい桜東風
鉛筆の片減りたどる蝮の道
なめらかな信条蛇が穴を捨つ
春愁や飛び石なかば立ち止る
名鐘は撞かず朧の月明り
花石榴町家の井戸に釣瓶なし

水無月や叱つてくれる人の減り
鬼灯の青さきのふと違ふ風
夏座敷コップ二つで足りる午後
短命は浄し無数の蟬の穴
白萩に隙なし抹茶すすりゐる
烏瓜つま先立ちの岩場越す
桐の実や飾り鎧の乾き切る
軋みなく門鎖す十三夜

双滴賞受賞作品

都峰 三賞

柳風櫂を忘れしだまし舟

山本 正

長考に入る破蓮の屯して

門馬貴美子

ポケットの硬貨桜草買えるほど

津野 洋子

仁 三賞

梅雨を待つ北山杉の息づかひ

吉田 愛子

土間涼し陣屋のくどに釜八つ

倉橋あつ子

裸木の樹にも自我あり影もあり

杉浦 満子

双滴賞

受賞作品

京都商工会議所会頭賞

大津市 鈴木 順子

少しづつ 煩惱捨つる 干大根

京都芸術文化協会理事長賞

京都市 仲井タミ江

遠き子へ夫の背幅に毛糸編む

京都府知事賞

大津市 田畑耕之介

京都新聞社賞

福山市 中島三喜子

寒 昴父は黙つてもものを言ふ

砂糖 壺一杯にして終戦日

京都市長賞

城陽市 松井 悦子

読売新聞社賞

京都市 岩木 雅子

泣きやまぬ嬰を汗ごと渡さるる

着ぶくれてだんだん大きくなる話

毎日新聞社賞

京都市 岡本 一路

京鹿子祭賞

福山市 北村 梢

男には男の日暮れ近松忌

打つたびに音のへこみし紙風船

朝日新聞社賞

京都市 藤本 純子

京鹿子祭賞

京都市 荒田 義枝

存命なら何論説かる花洛の忌

崩さねば何もおこらず冷奴

KBS京都賞

京都市 和田 うめ

京鹿子祭賞

長岡京市 高田 好子

引退を秘めて翁の祭笛

遠き日の鉄の匂ひや夾竹桃

NHK京都放送局長賞

京都市 藤岡 紫水

双滴賞

亀岡市 井上菜摘子

毒の字に何故か母ゐる茸山

あやとりの橋の裏側雪がふる

双滴賞

城陽市 鷺山 珀眉

はつ蝶のただ真つ白な一ページ

京鹿子祭賞

東京都 福島 照子

双滴賞

豊中市 村上 千紫

亀鳴くを待ちて晩成遠ざかる

朝寒や身にいくつかの蝶番



京鹿子集

豊田都峰選

ひぐらしのページは痛い白のまま

千葉 直江 裕子

さはやかと思へるほどに病む話

日付のない二人のための星月夜
すれ違ふ影はかりそめ秋隣

すれすれのたましひこんなに水澄んで

今朝の秋洗濯音まで快適に

アリソナ 伊吹 之博

罽雲時計と消せるボールペン

法師蟬市民講座は大盛況

晩秋や机の上の砂時計

受け答へ子等はそつなく秋うらら
家族からメール届きし良夜かな

アリンナ

まつさきの桜紅葉の二条城

秋の野に群れ咲く小花うす紫

オハイオ 水谷 直子

リハビリの箸につままる新大豆

松茸や出張帰りの婿土産

ばばさまの昔かたりべ十三夜

冬隣り食べもの埋めて栗鼠懸命

夕暮の甘さに惹かれつつくし

朝寒や早起き出来ぬ居候

京都 林 達男

露草の明るい悲哀摘んでみる